

4000万人の頭痛

77

『小児の頭痛』第7回〜小児の脳腫瘍とその頭痛の特徴について〜

文 清水俊彦

text by Toshihiko Shimizu

脳腫瘍というと、すべて悪性のようなイメージがありますが、実は良性から悪性、更にその中間型など様々あるのです。特に小児に発生する脳腫瘍は良性から中間型、すなわち悪性とも良性ともどちらとも言えない性質のものが多いようです。

その発生部位に関しては、大脳よりも小脳や脳幹に近い部位に発生することが多いのですが、小児は脳の発達自体が未完成でかつ、成人に比して自らその症状を訴える手段が拙いため、初期にはなかなか気付かれず、発見が遅れる傾向にあります。それ故、病院で検査した時には腫瘍自体がかなり成長し増大傾向にあることが多いのです。

小脳に発生する際には、明らかな手足の麻痺や運動障害は出ないのですが、なんとなく普通の小児に比べて、歩行の速度が遅かったり、よく転倒したりするなど、歩行の発育の遅れともとれる症状や、また左右どちらか一方に偏って歩行するなどの、なんとなくバランスの悪さが症状の前面に出ることがあ

ります。

また脊髄と大脳の継ぎ目である脳幹部に腫瘍ができると、構音障害のため、しゃべり方が鼻にかかったフランス語のような発音になったり、左右の眼球運動に障害をきたすと、複視により、ものがダブルってよく見えないと訴えたり、さらに顔面神経に腫瘍の圧迫が及ぶと、食事の際にどちらか一方の口角が下がるため、決まって一方の口角から涎が頻繁に出るなどの症状が出ますが、先にも述べた如く、これらの症状はまだ小さい子供だからと、なんとなく普通に見過ごされることの多い症状であるため、注意が必要なのです。腫瘍の増大と共に、脳脊髄液の循環が阻害されると、大脳の左右の脳室内の脳脊髄液が異常にたまり水頭症をきたすため、大脳全体の脳圧が上昇し始めます。特に睡眠中は呼吸が緩やかになるため、動脈血中の二酸化炭素濃度が上昇傾向にあるため、脳圧の上昇を助長し、起床時に頭痛と共に突然に嘔吐することが多いのです。が、その後は何事もなかったかのように普通に過ごす

ことが多く、やはり腫瘍の発見が遅れる傾向にあるのです。

同年代の健康な子供たちと比べて、なんとなく差異を感じたら、一度は医療機関で脳を精査してもらったことが、腫瘍の早期発見と、その後の治療経過に良好な結果をもたらすことが多いのです。

Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グリーンケアパートナー理事。

ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すぎの木クリニック、マミーズクリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。

昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クローズアップ現代」など、テレビ出演も多い。「頭痛女子のトリセツ」（マガジンハウス）をはじめ、頭痛関連の著書多数。



新刊「マンガでわかる頭痛・めまい・耳鳴りの治し方」
監修/清水俊彦 推薦/佐渡島庸平
新紀元社 (1,080円(税込))販売中。